有機農業の意義と現状

■有機農業の意義

農業には千年以上続く歴史があり、また、千年先の子孫へ継承すべき産業でもあります。農業は 私たちの生命を維持する「食」の根幹を支えると同時に、田んぼの保水機能など環境保全の役割も担っています。地球環境を守り、人を育むというこの二つの大きな使命を同時に果たすことができるのです。

一方、長年農薬や化学肥料が使用された農地では、化学物質が蓄積され農作物や周辺環境に影響が及ぶと指摘されています [1)]。化学肥料は土の力を奪い、土壌や水質を汚染します。また除草剤や殺虫剤などの農薬は周辺の生態系を破壊します。このような状態では、農業は環境保全どころか自然破壊の原因となります。

環境に負荷を与える農業ではなく、環境保全型の産業としての一つのアプローチとして、有機農業が挙げられます。有機農業を推進する国際 NGO「IFOAM（国際有機農業運動連盟）」では、有機農業を次のように定義しています [2)]。

> 「有機農業は、土壌・生態系・人々の健康を持続させる生産システムである。有機農業は、地域の状況に適合した生態的プロセス・生物多様性・循環に依存するものであり、悪影響を及ぼす投入物の使用を避ける。有機農業は、伝統・革新・科学を組み合わせて、共有の環境に利益をもたらすとともに、関係するすべてのものに、公正な関係や良質な生活を促進する。」

有機農業は、化学合成農薬や化学肥料の不使用及び、遺伝子組換技術を利用しないことを原則とし、土や周辺の生態系の力を活かしています。持続可能な有機農業は、土や水を守り周辺環境の生物多様性を維持するため、健全な生活環境づくりに資する取り組みであるといえます。

■有機農業の現状～農業全体に占める有機農業の割合～

農林水産省の資料によると、2010 年の国内有機農家数は約 1.2 万戸で、全農家数（約 253 万戸）に占める割合は約 0.5% と推計されています [3)]。また、同資料によると、2009 年国内有機農業の栽培面積は約 1.6 万 ha であり、農業全体の約 0.4% にとどまっています（うち、有機 JAS 認証済は 0.2%）。

IFOAM の資料に基づき、同省が発表した 2011 年諸外国との比較によると、EU 加盟国の有機農業の面積割合は高い傾向があります [4)]。日本の有機農場（有機 JAS 認証済）が国内全体の 0.2% であるのに対し、イタリアは 8.6%、フランスは 3.6%（2007 年比でほぼ倍増）と示されています。また、アジアでは、韓国の伸びが顕著です。韓国では「親環境農業」の推進により、有機農業の面積割合が 2007 年比で 1.0% に倍増したと伝えられています（表 -1）。

河北潟干拓地の有機農場に飛来する白鳥

表 -1　諸外国における有機農業の面積割合

地域	国名	2007 年	2011 年
EU	イタリア	9.0%	8.6%
	ドイツ	5.1%	6.1%
	イギリス	4.2%	4.0%
	フランス	1.9%	3.6%
北米	カナダ	0.8%	1.2%
	アメリカ	（2005 年）0.5%	0.6%
アジア	韓国	0.5%	1.0%
	中国	0.3%	0.4%
	日本（※有機 JAS 認証のみ）	0.1%	0.2%

出典：農林水産省「有機農業の推進に関する現状と課題」2013 年 8 月

出典：

1) 環境省 環境経済情報ポータルサイト 環境経済基礎情報「土壌汚染」
http://www.env.go.jp/policy/keizai_portal/A_basic/a17.html

2) International Federation of Organic Agriculture Movements (IFOAM)
"DEFINITION OF ORGANIC AGRICULTURE"
http://www.ifoam.org/en/organic-landmarks/definition-organic-agriculture

3)、4) 農林水産省 生産局 農産部 農業環境対策課「有機農業の推進に関する現状と課題」平成 25 年 8 月
http://www.maff.go.jp/j/council/seisaku/kikaku/organic/01/pdf/data6-1.pdf

UNITED NATIONS UNIVERSITY
UNU-IAS
Institute of Advanced Studies

株式会社金沢大地
川本　七穂子